

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

最終報告提出日
2012年9月30日

派遣生の基本情報

氏名：中尾道子

所属：韓国朝鮮文化研究専攻 韓国朝鮮歴史社会専門分野 博士課程3年（派遣時）

派遣形態：平成22年度夏個人派遣・大学院生

研究テーマ

人物画を中心とする朝鮮絵画の作品調査および関連文献資料の蒐集

派遣先での活動

(1)派遣先の基本情報

国名：大韓民国

都市名：ソウル特別市

研究機関名：ソウル大学校博物館、国立中央博物館、三星美術館 Leeum

コンタクトした主な研究者名：陳準鉉教授（ソウル大学校博物館）

朴銀順教授（徳成女子大学校）

趙志倫専任研究員（三星美術館 Leeum）

(2)派遣期間

出発日：2010年9月7日

帰国日：2010年10月6日

総日数：30日

主な研究成果

(1)当初の計画の概要

18世紀朝鮮は、朝鮮絵画史上、人物画が最も盛んに制作された時期の一つであり、その中には、複数の人物の集合的構成を表現したものも含まれる。本研究はそうした朝鮮におけるいわゆる群像表現を主な考察の対象とするものである。群像表現には、肖像画、風俗画、故事人物画、道釈人物画といった朝鮮絵画史研究における従来の人物画の各ジャンルの枠組みを超えたさまざまな用例の形象が見受けられる。今回の派遣の目的は、考察の対象となる作品の解析を行う前段階の作業として、作品の基礎的なデータの確認、および作品に直接関係する文献資料の蒐集を行うことである。ソウル大学校博物館に拠点を置き、同館の陳準鉉教授から指導を受けつつ、他に国立中央博物館、三星美術館 Leeum 等で絵画作品の調査を行い、加えて現地の研究者および日頃作品に接している美術館・博物館の学芸員から、作品に関する最新の情報の収集を行うことを主な課題とした。

(2)実際に達成された成果

1. ソウル大学校博物館における作品調査

派遣中の主な調査対象である道釈人物画の「群仙図」及び「神仙図」等を所蔵するソウル大学校博物館にて、作品の実見および写真撮影を行うことができた。また同館学芸研究官の陳準鉉教授のご教示により、本研究に関わる新出作品の所在情報を知り得た。またソウル大学校奎章閣韓国学研究院において関連する文献史料のマイクロフィルムを閲覧し、必要とする箇所のコピーを入手した。

2. 三星美術館 Leeum における作品調査

本研究の全体に関わる重要な作品でありながら、これまで実見の機会が得られなかった同館所蔵の金弘道「群仙図屏風」(韓国・国宝 139 号)の調査を行うことができた。また本研究で主に扱う金弘道(1745~1806 以降)とその後援者及び収蔵家との関係を明かす『丙辰年画帖』の他、画面の破損が激しいため 2007 年から 2009 年まで修復に入っていた正祖(在位 1777~1800)と金弘道の関係を示す「三公不換図」(1801 年作)、これまで個人が所蔵していたものを同館が昨年購入した「布衣風流図」等、三星美術館 Leeum 所蔵の金弘道作品をすべて実見、調査することができた。また、同館学芸員の趙志倫氏より作品に関わる貴重な情報および画像データをいただいた。

3. 国立中央博物館における作品調査

本研究に関わる作品中、李寅文「樓閣雅集図」、伝金弘道「海上群仙図屏風」等、以前調査できなかった作品を中心に計 10 件 33 点の閲覧および写真撮影を実施した。

この他、徳成女子大学の朴銀順教授のご教示により、金弘道以降の群仙イメージの系譜を辿る上で欠くことのできない重要作品として、19 世紀末に制作された安中植・趙錫晉筆の「海上群仙図」(1892 年、漢陽大学校博物館蔵)に関する情報を知り得た。

以上の結果、本研究に必要不可欠となる絵画作品の調査および作品に関連する文献資料、写真データの蒐集を行うことができ、博士論文執筆に必要なデータの大部分を揃えることができた。また、現地の研究者との交流により、新出作品の所在を確認することができ、今後の研究の方向性を固めることができた点は今回の派遣の大きな成果である。

(3)今後の研究展望

今回の調査研究を通して得られたデータをもとにまずは綿密な作品解析を行う。この基礎作業をある程度進めた後に、自身のこれまでの研究を補完しつつ、朝鮮絵画における人物表現とその変容をめぐる問題に焦点を当てた研究を進めていく予定である。最終的には、朝鮮絵画において人物がどのように描かれ、どのような意味を担い、そしてどのような機能を果たしていたのかという表現上の問題と、絵画の制作者と描かれた人々、またそれを享受した人々との関係性、それを含む絵画の鑑賞形態の変化といった社会的な問題とを結びつけて再解釈することを目標とする。韓国国内で朝鮮絵画研究の蓄積が相当数なされている今、外国人研究者としてそれらを消化しつつその特性を検証し考察を重ねることは、広く東アジア絵画史研究のなかに朝鮮絵画を位置づけるに際し、いくらかの知見の提供となるのではないかと考える。